

馮夢龍の号「墨憨齋」について

山口, 綾子
九州大学大学院人文科学府 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/1650862>

出版情報 : 中国文学論集. 44, pp.146-159, 2015-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

馮夢龍の号「墨憨齋」について

山口 綾 子

馮夢龍（一五七四—一六四六）が編纂を手掛けた作品は多岐にわたるが、それらを仔細に見ると、彼が自己の作品に署名する際に用いた筆名もまた多様であることに気付かされる。現存する彼の作品においては、実名の馮夢龍、字の猶龍や子猶、号の墨憨齋などが頻繁に使用され、一例しか見えないものも含めるとその筆名は十種類以上にのぼる。特に雅号「墨憨齋」は、実名と字に次いで多く用いられており、世間にもその雅号が確実に広く知られていたと考えられる。本稿は、まず、馮夢龍の筆名使用の実態を明らかにした後、彼が特に頻繁に用いた号「墨憨齋」に着目し、その意味や彼の書籍編集の態度について検討するものである。

一 馮夢龍の筆名の整理

馮夢龍の伝記は正史には見えないが、幾つかの地方志に彼に関する記述がある。『蘇州府志』巻十八には「馮夢龍、字猶龍、才情跌宕、詩文麗藻、尤明經字。（馮夢龍、字は猶龍、才情は跌宕たるも、詩文は麗藻にして、尤も經学に明るし。）」と記し、馮夢龍の字の一つである「猶龍」を示す。その名の由来は『史記』老子列伝中の故事にあり、孔子が老子に会った後、老子に対して「其猶龍邪（龍のようにつかみどころのない人物）」と評したという故事を踏まえて名付けたとされる。^②

また、王驥徳『曲律』に見える馮夢龍の序には、「天啓乙丑春二月既、古後學馮夢龍題於葑溪之不改樂庵」と署名

した。この「不改樂庵」は『論語』雍也篇に見える顔回⁽³⁾の故事を踏まえることが指摘されている。

以上の例によると、馮夢龍は典故に基づいた何らかの意味を持つ名を用いたことが分かる。ならば、彼が愛用する号「墨憨齋」にも彼の深い意図が込められていることも容易に想像できよう。

まず、馮夢龍の筆名の使用状況を作品の性質、及び編纂年代ごとに整理する。

馮夢龍が編纂を手掛けた書籍は、科挙の参考書となり得るような経学や史志の書から、小説や戯曲といった通俗性の強い作品に至るまで、幅広い分野にわたる。次の表1では、馮夢龍の作品の性質と筆名の使用の関連を把握するため、彼の手による主要な出版物とその筆名を書籍の分類ごとに整理した。分類の基準は高洪鈞編著『馮夢龍箋注』(天津古籍出版社、二〇〇六年)に依拠し、刊行された年代が判明している作品には年号を付した。

【表1】馮夢龍の出版物の分類と筆名の使用

分類	書名	刊行年	筆名
經学	麟經指月	一六二〇年序	古呉馮夢龍猶龍父述
	春秋衡庫	一六二五年序	古呉後学馮夢龍述
史志	四書指月	不明	馮夢龍纂評
	寿寧待志	一六三七年自序	寿寧令馮夢龍述
	綱鑿統一	一六四三年自序	古呉馮夢龍猶龍甫題
	甲申紀事	一六四五年刊	七一老人草莽臣馮夢龍述
	中興実録	不明	七一老臣馮夢龍拜述
小説	中興偉略	不明	七十二老臣馮夢龍恭撰
	古今小説	不明	緑天館主人題(可一居士)
	警世通言	一六二四年序	可一居士
	醒世恒言	一六二七年自序	可一居士
	墨憨齋批点北宋三遂平妖伝 今古奇観	一六二〇年序 不明	墨憨齋手校 墨憨齋手定

馮夢龍の号「墨憨齋」について

伝奇	詞曲	筆記	
墨憨齋定本伝奇	掛枝兒 山歌 太霞新奏 墨憨齋詞譜	情史 太平広記鈔 智囊 古今笑 笑府	石點頭 三教偶拈 新列国志 不明 不明 不明
	馮夢龍没後刊 一六二七年刊 不明 不明	一六二〇年自序 一六二六年序 一六二六年序 不明	古呉龍子猶撰（墨憨主人評） 馮夢龍輯 呉門可觀道人小雅氏撰
	龍子猶 墨憨齋主人題 香月居顧曲散人題	猶龍 呉邑馮夢龍識 呉人龍子猶叙	

表により明らかに分かるのは、経学や史志に類される作品はすべて実名「馮夢龍」を記す点である。刊行年や序刊年が明記される作品のみを見ても、刊行された年代はおよそ二十年以上にわたっており、一貫して実名表記を選び続けたと考えてよいだろう。一方、「墨憨齋」の署名は、民間に流行する歌謡を集めた『山歌』や笑話集『笑府』を始めとして、小説集、笑話集、伝奇、詞曲などの書籍群に見られる。この表を一見すると、通俗的要素の強い作品に「墨憨齋」を用いているようだが、その通俗性を理由に「墨憨齋」の筆名を選んだと結論付けるのは些か早計かと思われる。注意すべきは、馮夢龍の意識において筆名の選択に一定程度の基準があったことであり、書籍の編集態度もその基準に大きく関わっていたと推測できる。

では、「墨憨齋」の使用はどの作品まで遡ることができるのか。そして、年を経るにつれ、その使用状況はどのように変化するのか。ここでは刊行年の明らかな作品、あるいは信頼性のある根拠に基づいて刊行年の推測がなされている作品を対象に年表を作成した上で、筆名使用の実態を調査する。なお、刊行年の推測についても前掲『馮夢

龍箋注』に依拠する。

【表2】馮夢龍の出版物の刊行年と筆名使用の推移

年号(西暦)	馮夢龍の年齢	出来事
万曆二年(一五七四)	一歳	馮夢龍生。
万曆三十三年(一六〇五)	三十二歳	『掛枝児』(馮猶龍編) 刊行。
万曆三十八年(一六一〇)	三十七歳	『山歌』(墨憨齋編) 刊行か。
万曆四十三年(一六一五)	四十二歳	『笑府』(墨憨齋編) 刊行か。
万曆四十八年(一六二〇)	四十七歳	『古今笑』(墨憨齋編) 編刻。
天啓元年(一六二一)	四十八歳	『古今小説』(可一居士) 刊行か。
天啓二年(一六二二)	四十九歳	『新平妖伝』(墨憨齋批点) 刊行。
天啓四年(一六二四)	五十一歳	『警世通言』(可一居士) 刊行。
天啓六年(一六二六)	五十三歳	『智囊』『太平広記鈔』(馮夢龍編) 刊。
天啓七年(一六二七)	五十四歳	『醒世恒言』(可一居士) 刊。
崇禎元年(一六二八)	五十五歳	『情史類略』(龍子猶編) 刊行か。
崇禎七年(一六三四)	六十一歳	福建寿寧知県赴任。
崇禎十二年(一六三九)	六十六歳	『今古奇観』(墨憨齋編) 刊行か。
崇禎十七年(一六四四)	七十一歳	『新列国志』(馮夢龍補定) 刊行。
順治三年(一六四六)	七十三歳	馮夢龍没。

現時点で刊行年の判明している作品、および刊行年代の推測可能な作品を見る限り、馮夢龍は作品を刊行し始めて間もなくして既に「墨憨齋」の名を使い始めたようで、その使用が集中的に見られるのも刊行初期であると言えよう。特に『笑府』においては、冒頭の序に「墨憨齋主人題」と記すほか、各巻全てに「墨憨子曰」で始まる序を付している点は注目に値する。現在推定される年代に間違いなければ、彼は『笑府』において初めて本格的にこの号を使用したと考えられる。

馮夢龍の号「墨憨齋」について

二 「憨」 ㄊㄨㄢˇ

馮夢龍の主要な出版物における筆名の使用状況については明らかとなつたが、やはり実名と字を除いては「墨憨齋」の使用が目立つ。「墨憨齋」という号は何を意味するのか。墨憨齋の「墨」は文事や文筆業を指す。「憨」字の原義は「愚かである、気が狂っている」ことで、この字の解釈については『玉篇』における「憨、愚也。」が現在確認できる中で最も古いものである。「憨」は、同様の意味を持つ「痴」や「狂」とともに物事に熱中する状態をやや自虐的に表していると考えられ、したがって、「墨憨」の意味するところは「文筆業に没頭する」となる⁴。

では、馮夢龍の号「墨憨齋」における「憨」とは、具体的に何を意図して用いられた語であつたのか。馮夢龍にとつてどのようなイメージと結びつく語であつたのだろうか。

馮夢龍の作品の中には「痴」字を用いる例も多数見える。まずは、「憨」と同様に「おろか」を意味する語として「痴」を手掛かりに考察を加えたい。まず『古今笑』痴絶部の次の例が挙げられる。

子猶曰、虎頭三絶、癡居一焉。癡不可乎。得斯趣者、人天大受用處也。碗大一片赤縣神州、衆生滿、原屬假合、若復件件認真、爭競何已。故直須以癡趣破之。過則驕、不及則愚、是各有不受用處。若夫妒、愛、貪、嗔、還以認真受諸苦惱。至癡而惡焉、則畜生而已矣。母爲鴟嚇、母爲螳怒。不癡福、且違癡禍。集「癡絶」第三。

(子猶曰く、虎頭三絶は、癡を一に居く。癡は可ならざるか。斯の趣を得る者、人天の大いに受用する處なり。碗大一片の赤縣神州に衆生滿ち、原假合に屬す、若し復た件件認真せば、争競は何ぞ已まんか。故に直ちに須らく癡趣を以て之を破るべし。過ぐれば則ち驕、及ばざれば則ち愚、是れ各受用せざる處有り、夫れ妒、愛、貪、嗔が若きは、還た認真するを以て諸の苦惱を受く。癡に至りて焉を惡めば、則ち畜生なるのみ。鴟嚇を爲す母れ、螳怒を爲す母れ。癡ならざるは福、且つ癡に違ふは禍。「癡絶」第三を集む。)

「痴」である状態を肯定的にとらえ、なおかつ評価する姿勢を示す記述であると言えよう。「過則驕、不及則愚」という表現によれば、彼の認識の上で「痴」と「愚」には差異があり、「愚」には否定的な、「痴」には肯定的な印象を抱いていると考えられる。また、『醒世恒言』には、「花癡」、すなわち花狂いの老人の話が見えるが、これは花

に異常に熱中している様子を表す。

以上の例に見えるように、「痴」が意味する「おろかさ」は、熱中する、夢中になるという意味に通じるものであり、「愁」にも同様に一定程度の肯定的な評価が加味されているであろう。

馮夢龍が「愁」字に投影したイメージを明らかにするには、彼以前の「愁」の用例を確認しておく必要がある。その一つには、顔師古『隋遺録』に収められる宝兒の逸話が挙げられる。

帝謂世南曰、「昔傳飛燕可掌上舞、朕常謂儒生飾於文字、豈人能若是乎。及今得寶兒、方昭前事。然多愁態、今注目於卿。卿才人、可便嘲之。」世南應詔爲絕句曰、「昔傳ふ、飛燕掌上に舞ふべしと、朕常に謂へらく、儒生文字を飾る、豈に人能く是くのごとからんや。今に及びて寶兒を得、方に前事を昭らかにす、然れども愁態多く、今卿に注目す、卿は才人なり、便ち之を嘲るべし。」と。世南詔に應へ、絶句を爲りて曰く、「鴉黄を畫くを學びて半ば未だ成らず、垂肩鞞袖ただ愁生なり。愁に縁りて卻つて君王の惜しむを得、長く花枝を把りて翬に傍つて行く。」と。上大いに悦ぶ。

隋煬帝の寵愛を受ける宝兒という少女について述べた表現の中に「多愁態」、すなわち無邪気なしぐさが多いと述べられ、また、虞世南の詩の中にも「太愁生」と見える。この逸話は、馮夢龍の『醒世恒言』と『情史類略』にほとんど同じ表現で収められており、馮夢龍が「愁」という字に対して持つ印象に影響を与えていることは間違いないだろう。

続いて、金の元好問作の詩の用例が注目される。彼の詩には「愁」字がしばしば用いられるが、特に次に挙げる『杏花雜詩十三首』其一是『隋遺録』の宝兒の逸話を踏まえて発展させた例と言える。

元好問「杏花雜詩十三首」其一（『遺山先生集』卷十一）

杏花牆外一枝橫 杏花 牆外に一枝横たわる

半面宮妝出曉晴 半面の宮妝 曉晴に出づ

看盡春風不回首 春風を看盡して 回首せず

馮夢龍の号「墨憨齋」について

寶兒元是太憨生 寶兒は 元是れ 太だ憨生なり

この詩では宝児を杏花にたとえており、故事を引用した「太憨生」という表現も用いられる。

元好問「杏花」(『遺山先生集』卷十二)

桃李前頭一樹春 桃李の前頭 一樹の春

絳脣深注蠟猶新 絳脣深く注ぎ 蠟猶ほ新たななり

只嫌憨笑無人管 只だ嫌ふ 憨笑 人の管ふ無く

鬧簇枯枝不肯勻 鬧簇れる枯枝 勻ふを肯ぜざるを

もう一例は、杏花が自然のあるがままに咲く様子を「憨笑」と表現するものである。元好問は杏花を愛する心情を表した詩をししばし作るが、その中で杏花が自然のまままで何の銜もない様子、天真爛漫な様子を表現するのに「憨」という字を用いたことが分かる。

元好問の詩からの直接の影響については定かではないが、「憨」という字が元来、純粹、天真爛漫、無邪気などといったイメージに結びつくものであったことは明白であろう。『醒世恒言』『情史類略』の二書に重ねて宝児の故事を引いたことを踏まえると、馮夢龍もこのような印象を受け継いでいたと考えられる。

三 「童痴」について

『山歌』や『笑府』が「墨憨齋」を使用する最初の出版物であることは先述の通りだが、これらの中には「童痴」を冠する別名が存在する。『山歌』については序文の「叙山歌」の中に「童痴二弄」の名が見え、『笑府』は「絶纒三笑」によって「童痴三弄」と呼ばれていることが分かる。

笑話舊俗刻無論、近刻收稍廣而加以議論者、自『笑林評』始、然識淺而見迂、……其強人意者、童痴三弄中『笑府』。此故自有韻之士所輯、非笑語不錄。又煩簡筆削之間、各自有致。(笑話は舊俗を刻するは論無く、近刻を収むるは稍廣くして加ふるに議論を以てする者、『笑林評』より始まる、然れども識は淺くして見は迂し、……)

其の人意を強むる者は、童痴三弄中の『笑府』なり。此の故に有韻の士より輯むる所、笑語に非ずんば録せず。又煩簡筆削の間、各自ら致す有り。）

『絶纓三笑』は万曆四十四年（一六一六年）の刊行で、『笑府』の刊行時期もこれに限りなく近い頃だと推測される。また、『山歌』以前に刊行されていた『打棗竿』（『掛枝兒』には「童痴一弄」の呼び名もある。その『打棗竿』には兪琬綸の序「打棗竿小引」が付されるが、そこに次の記述がある。

街市歌頭耳、何須手爲編輯、更付善梓、若欲不朽者、可謂童痴。……蓋吾與猶龍、俱有童痴、更多情種。（街市に歌頭あるのみ、何ぞ須らく手もて編輯を爲すべからん、更に善梓を付し、朽ちざらんと欲するがときは、童痴と謂ふべし。……蓋し吾と猶龍とは、俱に童痴有り、更に情種多し。）

街中で耳にした歌に手を加え、書き付けて残そうという心を「童痴」とする。馮夢龍は「童痴有り」として、このような性質の人物だと述べられている。「童痴」における「童」について考えるに、当時流行していた「童心説」が想起される。李贄は『焚書』卷三において次のように述べる。

夫童心者、真心也。若以童心爲不可、是以真心爲不可也。夫童心者、絶假純真、最初一念之本心也。若夫失卻童心、便失卻真心。失卻真心、便失卻真人。人而非真、全不復有初矣。童子者、人之初也。童心者、心之初也。……蓋其人既假、則無所不假矣。由是而以假言與假人言、則假人喜。以假事與假人道、則假人喜。以假文與假人談、則假人喜。無所不假則無所不喜、滿場是假、矮場阿辯也。雖有天下之至文、其湮滅於假人而不盡見於後世者、又豈少哉。何也、天下之至文、未有不出於童心焉者也。苟童心常存、則道理不行、聞見不立、無時不文、無人不文、無一樣創制體格而非文者。（夫れ童心は、真心なり。若し童心を以て不可と爲せば、是れ真心を以て不可と爲すなり。夫れ童心は、絶假純真、最初一念の本心なり。若し夫れ童心を失卻すれば、便ち真心を失卻す。真心を失卻するは、便ち真人を失卻す。人にして眞に非ざるは、全て復た初有らず。童子は、人の初なり。童心は、心の初なり。……蓋し其の人既に假なれば、則ち假ならざる所無し。是に由りて假言を以て假人と云へば、則ち假人喜ぶ。假事を以て假人と道へば、則ち假人喜ぶ。假文を以て假人と談れば、則ち假人喜ぶ。假ならざる所無くれば則ち喜ばざる所無し、滿場は是れ假なり、矮場は辯に阿るなり。天下の至文有りとも雖も、

其れ假人に湮滅して盡く後世に見れざるは、又豈に少なからんや。何となれば、天下の至文は、未だ童心より出でざる者有らざるなり。苟しくも童心常に存すれば、則ち道理行かず、聞見立たず、時に文ならざる無く、人に文ならざる無し、一様に體格を創制して文に非ざる者無し。

この記述によれば、「童心」とは真心のことで、童心とは仮偽なくして純粹に真であるものである。「童」の対となるものが「仮」であつて、仮人の間では童心から生じる天下の至文は喜ばれず、そのために失われたものも多いはずだとし、そして童心から出る文はいつの時代も価値があると論じられる。この「童心」の概念は「憨」の字に表れる純粹さに通じるところがある。したがつて、馮夢龍は「憨」や「童」に表れる純粹さを好んで自らの号や作品の名に採用した可能性が考えられるのである。

四 馮夢龍の編纂態度との係わり

「墨憨齋」や「童痴」と名付けた馮夢龍の意図は、作品の編纂や刊行にどう関わっていたのか。「墨憨齋」を用いる初期の作品で、かつ「童痴」を冠する『山歌』及び『笑府』の編纂態度について検討したい。

『山歌』の序文にあたる「叙山歌」においては、「仮」や「真」という『童心説』に見える語を用いて、『山歌』を編纂した意図を述べている。⁽⁹⁾

古書契以來、代有歌謠、太史所陳、並稱風雅、尚矣。自楚騷唐律、爭妍競暢、而民間性情之響、不得列於詩壇、於是別之曰山歌、言田夫野豎矢口寄興之所爲、薦紳學士家不道也、……、且今雖季世、而但有假詩文、無假山歌、則以山歌不與詩文爭名、故不屑假、苟其不屑假、而藉以存真、不亦可乎、……、若夫借男女之真情、發名教之僞藥、其功於『掛枝兒』等、故錄『掛枝詞』而次及『山歌』。墨憨齋主人題。(古の書契以來、代に歌謠有り、太史の陳ぶる所、並びに風雅を稱するは、尚し。楚騷唐律より、妍を争ひ暢を競ひて、民間の性情の響は、詩壇に列するを得ず、是に於て之を別かちて山歌と曰ふ、田夫野豎の矢口寄興の爲す所にして、薦紳學士家の道はざるところを言ふ、……、且つ今は季世と雖も、但だ假の詩文有りて、假の山歌無し、則ち山歌を以て詩文

の名を争ふに與らず、故に假たるを屑しとせず、苟くも其れ假たるを屑しとせずんば、藉るに存眞を以てするも、亦た可ならざらんや、……、若し夫れ男女の眞情を借り、名教の僞藥を發けば、其の功『掛枝兒』に等し、故に『掛枝詞』を録して次に『山歌』に及ぶ。墨憨齋主人題す。）

さらに、先述の通り「墨憨齋」の名を多用する『笑府』は、序において次のように述べる。

古今來莫非話也、話莫非笑也。……或笑人、或笑於人。笑人者亦復笑於人、笑於人亦復笑人。人之相笑寧有已時。『笑府』集笑話也。十三篇猶曰薄乎云爾。或閱之而喜、請勿喜。或閱之而嘖、請勿嘖。古今世界一大笑府、我與若皆在其中供人話柄。不話不成人、不笑不成話、不笑不話不成世界。布袋和尚、吾師乎、吾師乎。墨憨齋主人題。（古今來、話に非ざるは莫く、話は笑ひに非ざるは莫きなり。……或いは人を笑ひ、或いは人に笑はる。人を笑ふ者も亦た復た人に笑はれ、人に笑はるるも亦た復た人を笑ふ。人の相笑ふは寧ろ已む時有らんや。『笑府』は笑話を集むるなり。十三篇は猶ほ薄きかな爾云ふと曰ふ。或いは之を閲して喜ぶも、請ふ、喜ぶ勿れ。或いは之を閲して嘖るも、請ふ、嘖る勿れ。古今世界は一大笑府にして、我と若とは皆其の中に在りて人の話柄を供すればなり。話さざれば人を成さず、笑はざれば話を成さず、笑はず話さざれば世界を成さず。布袋和尚は、吾が師なるか、吾が師なるか。墨憨齋主人題す。）

『笑府』の集める笑話は、特定の人物に対する笑いではない、誰もが笑いの提供者であつて、それを見て喜ぶことも怒ることもないのである、という内容である。『笑府』の収める笑話に、社会的強者あるいは弱者を笑う話が少くないのは事実であるが、『笑府』序は、誰か特定の人物を指し揶揄するのではない、邪心のない純粹な笑いを集めたことを主張している。前章で考察した「童心」などの概念に通じる部分があるだろう。馮夢龍は作品の編纂に際し、「憨」や「童心」という概念をもつて臨んだことを表明しているのである。

五 おわりに

馮夢龍の筆名の使用は、作品の性質によつてもある程度の区分があり、公開の筆名である「墨憨齋」を用いる作

品は、小説集や笑話集などに多かつた。刊行時期が判明しているもの、あるいは馮夢龍の編集物と推定されている現存作品の中で「墨憨齋」を記すものは、『山歌』及び『笑府』が最も早く、これらの作品は別名に「童痴」を冠する。「憨」や「童」の字を筆名や書名に採用したことから推測できるのは、童心説が流行していた当時の蘇州において、馮夢龍はそのような思想に通じる思考を持ち作品編纂に臨むことを表明する意図があった。

馮夢龍が「墨憨齋」とあえて名付けなければならなかった理由として現時点で考えられ得る可能性を、最後に指摘しておきたい。すなわち「文事に没頭する」人物であることを言うこの号は、馮夢龍が自ら名付けた字や他の筆名に比べると些か異質であるように思われる。「墨憨齋」と名付け、それを用的に続けることとなった契機を求める手掛かりとして、鈕琇『觚賸続編』卷二「英雄拳動」を挙げる。

熊公廷弼、當督學江南時、……吾具馮夢龍、亦其門下士也。夢龍文多遊戲、『掛枝兒』小曲、與『葉子新闢譜』、皆其所撰。浮薄子弟、靡然傾動、至有覆家破產者。其父兄群起訐之。事不可解。適熊公在告、夢龍泛舟西江、求解於熊。相見之頃、熊忽問曰、海內盛傳馮生『掛枝兒』曲、曾携一二冊以惠老夫乎。馮踟躕不敢置對、唯唯引咎。（熊公廷弼、督學江南に當りし時、……吾が具の馮夢龍も亦た其の門下の士なり。夢龍の文は遊戲多く、『掛枝兒』小曲と、『葉子新闢譜』とは、皆其の撰する所なり。浮薄の子弟は、靡然として傾動し、家を覆し産を破る者有るに至る。其の父兄群起して之を訐る。事解くべからず。適熊公告に在り、夢龍舟を西江に泛べ、解くを熊に求む。相見の頃、熊忽として問ひて曰く、海内盛んに馮生の『掛枝兒』曲を傳ふ、曾ち一二冊を携へて以て老夫に恵まんか。馮踟躕し敢へて置對せず、唯唯咎を引く。）

熊廷弼が「督學江南」すなわち江南提學御史の任にあつたのは万曆三十九年（一六一一）から万曆四十一年（一六一三）までのこと、すなわち馮夢龍三十八歳から四十歳のころであった。『絶纓三笑』によつて推測される『笑府』の制作年代は万曆四十三年（一六一五）年前後である。『掛枝兒』などの俗曲を世に出したことで自身の子弟の父兄から攻撃を受けるような事件が実際に起こつたならば、馮夢龍にとつてそれは重大な出来事であり、世間では否定されるような通俗的な書物を編纂し刊行することを再考する契機ともなり得たであろう。この故事は熊廷弼が自らの大器ぶりを示すものだが、馮夢龍が熊廷弼に泣きつく程に困り果てたのは誇張ではなかつたように思われる。

出版物を刊行し始めた頃の馮夢龍にとつてはあるいは転機ともなり得る大事件であつたことが察せられよう。この出来事を経て『笑府』を刊行するに際し、徹底して「墨憨齋」を名乗つた背景には、本稿で述べたように「憨」字の持つ概念を表明する意図があるほかに、当時彼が経験したある種の挫折感を振り切る意図が込められているのではないだろうか。

注

(1) 沈自晋「和子猶」辞世」二律」其二(「南詞新譜」)に、

詞隱琴亡凭汝寄 詞隱の琴亡べば 汝の凭りて寄するも

墨憨薪盡問誰傳 墨憨の薪盡きなば 誰の傳ふるかを問ふ

芳魂逝矣猶相傍 芳魂は逝きて猶ほ相傍ふること

如在長歌短嘆邊 長歌短嘆の邊に在るがごとし

とある。沈自晋は詩中で「詞隱」と呼ばれる沈璟(馮夢龍の戯曲の師)の同族に当たる。馮夢龍の「辞世」詩は現存が確認できないが、この詩に見えるように、馮夢龍を指す語として「墨憨」が用いられ、当時「墨憨齋」は彼の代名詞として知られていたと考えられる。

(2) 『史記』卷六十三老子列伝に「孔子去、謂弟子曰、鳥、吾知其能飛。魚、吾知其能游。獸、吾知其能走。走者可以爲罔、游者以爲綸、飛者可以爲矰。至於龍、吾不能知其乘風雲而上天。吾今日見老子、其猶龍邪。(孔子去り、弟子に謂ひて曰く、鳥、吾其の能く飛ぶを知る。魚、吾其の能く游ぐを知る。獸、吾其の能く走るを知る。走る者は以て罔を爲すべし、游ぐ者は以て綸を爲すべし、飛ぶ者は以て矰を爲すべし。龍に至りては、吾其の風雲に乗じて天に上るを知る能はず。吾今日老子に見ゆ、其れ猶ほ龍のごときかと。)」とある。

(3) 陳希音「馮夢龍の宅名和筆名」(『學術月刊』一九八三年第二期、學術月刊社)に、「除人們都已知道的墨憨齋外、馮夢龍曾爲王驥德所著『曲律』作序、末署天啓乙丑春二月既、古吳後學馮夢龍題於葑溪之不改樂庵。葑溪是馮夢龍居家

馮夢龍の号「墨憨齋」について

所在、不改樂庵爲其另一室名、取『論語』一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪甚憂、回也不改其樂意。」とある。

- (4) 号「墨憨齋」の意味については、先に大木康『明末のはぐれ知識人馮夢龍と蘇州文化』（講談社、一九九五年）などにも言及されている。

- (5) 『醒世恒言』卷四「灌園叟晚逢仙女」に「倘然是一種名花、家中沒有的、雖或有、已開過了、便將正事撇在半邊、依不捨、永日忘歸。人叫他花癡。或遇見賣花的有株好花、不論身邊有錢無錢、一定要買。」とある。

- (6) 『醒世恒言』卷二十四「隋煬帝逸遊召讎」における該当箇所は以下の通り。

帝謂世南曰、「昔傳飛燕可掌上舞、朕常謂儒生飾於文字、豈人能若是乎。及今得寶兒、方昭前事。然多憨態、今注目於卿。卿才人、可便作詩嘲之。」世南應詔、爲絕句云、「學畫鶯黃半未成、垂肩鞞袖太憨生。緣憨卻得君王寵、長把花枝傍輦行。」帝大悅。（帝世南に謂ひて曰く、「昔傳ふ、飛燕掌上に舞ふべしと、朕常に謂へらく、儒生文字を飾る、豈に人能く是くのごとからんや。今に及びて寶兒を得、方に前事を昭らかにす。然れども憨態多く、今卿に注目す。卿は才人なり、便ち詩を作りて之を嘲るべし。」と。世南詔に應へ、絶句を爲りて云ふ、「鶯黃を畫くを學び半ばにして未だ成らず、垂肩鞞袖太だ憨生なり。憨に緣りて卻つて得る君王の寵、長く花枝を把りて輦に傍つて行く。」と。帝大いに悦ぶ。）

字句に異同はあるものの『隋遺錄』にほぼ通じる。また、『情史類略』卷五「隋帝広」に収める故事についても、該当箇所を以下に示す。

帝謂世南曰、「昔傳飛燕可掌上舞、常謂儒生飾於文字。今觀寶兒信然。然多憨態、今注目於卿。卿可嘲之。」世南應詔、爲絶句云、「學畫鶯黃半未成、垂肩鞞袖太憨生。緣憨卻得君王惜、長把花枝傍輦行。」上大悅。（帝世南に謂ひて曰く、「昔傳ふ、飛燕掌上に舞ふべしと、常に謂ふ、儒生文字を飾ると。今寶兒の信然たるを觀る。然れども憨態多く、今卿に注目す。卿之を嘲るべし。」と。世南詔に應へ、絶句を爲りて云ふ、「鶯黃を畫くを學び半ばにして未だ成らず、垂肩鞞袖太だ憨生なり。憨に緣りて卻つて得る君王の惜、長く花枝を把りて輦に傍つて行く。」と。上大いに悦ぶ。）

- (7) 元好問の杏花詩及び詩中の「憨」の解釈については、竹村則行「一生心事杏花詩——元好問の杏花詩について——」

- (『九州文化史研究所紀要』第三十六号、九州大学九州文化史研究所、一九九一年)に詳しい。
- (8) 「絶纒三笑」の解題及び『笑府』の編纂年代の考証については、大塚秀高『絶纒三笑』について(『中哲文学会報』第八号、東大中哲文学会、一九八三年)を参照。
- (9) 「叙山歌」については、大木康『馮夢龍「山歌」の研究 中国明代の通俗歌謡』(勁草書房、二〇〇三年)を参照。
- (10) 熊廷弼と馮夢龍の故事については、前掲注(9)の大木康氏著書にも指摘がある。